The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語を上層言語とする宜蘭クレオールの疑問文
Author(s)	簡, 月真
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 93-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 16 号（2019 年 7 月）93-111

日本語を上層言語とする宜蘭クレオールの疑問文

簡　月真

【キーワード】宜蘭クレオール、真偽疑問文、選択疑問文、疑問詞疑問文、のか疑問文

【要旨】
本稿は、日本語を上層（語彙供給）言語、アタヤル語を基層言語とする「宜蘭クレオール」の疑問文について論じるものである。東岳村で得たデータをもとに考察を行った結果、次のようなことが明らかになった。まず、宜蘭クレオールでは、疑問の終助詞にアタヤル語由来の ga が、疑問詞に日本語由来の形式が取り込まれている。次に、①真偽疑問文の「か疑問文」では主に上昇イントネーションが用いられるが、終助詞 ga も散見されること、②真偽疑問文の「のか疑問文」では終助詞 ga が義務的であること、③選択疑問文では終助詞 ga がわずかに観察され、主にトピックマーカーga が使われること、④疑問詞疑問文では終助詞 ga も上昇イントネーションも使われないことがわかる。そして、世代間変異から、真偽疑問文の「か疑問文」では動詞述語の現在進行形と過去形で終助詞 ga が先に消失したことが推測される。特に終助詞 ga が真偽疑問文の「のか疑問文」の標識に特化したことは宜蘭クレオールの特徴として挙げられる。なお、宜蘭クレオールの終助詞 ga には《質問》以外の機能もある。

1.　はじめに

宜蘭クレオールは、日本植民地統治（1895 年～1945 年）によって台湾に持ち込まれた日本語と台湾のアタヤル（＝タイヤル）語・セデック語とが接触した結果生まれた新しい言語である[1)]。このクレオールは、日本語を上層言語（語彙供給言語）、アタヤル語を基層言語、閩南語と華語を傍層言語としており（Chien 2015・簡 2018a）、台湾東部宜蘭県の山間部に住むアタヤル人とセデック人によって使われている。

宜蘭クレオールの形成にかかわる歴史的・社会的背景やクレオールとしての認定に関しては、真田・簡（2007・2008）、土田（2008）、Chien＆Sanada（2010）などで論じられている。また、言語的構造の記述も真田・簡（2007・2008）、安部ほか（2008）、Huang（2009）、簡・真田（2011）、Chien（2015・2016）、真田（2015）、簡（2018a・2018b・2019a・2109b）などによって進められている。これらによって、宜蘭クレオールの歴史的・社会的背景と言語的構造が明らかになりつつあるが、全体像の把握には至っていない。そこで、本稿は、宜蘭クレオールの言語構造の記述の一環として、疑問文を取り上げる。記述言語学の手法とともに、社会言語学の観点も取り入れて、疑問文の統語的特徴を明らかにしたうえで、世代間変異から変化のプロセスを捉えることを試みる。

1）セデック語もかかわっていたと推測されるが、これまでのところ、宜蘭クレオールにセデック語の影響はほとんど観察されない。それにはセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる（Chien＆Sanada 2010、簡・真田 2011、簡 2018a など）。

以下では、まず第 2 節でアタヤル語と日本語の疑問文を概観する。次に、第 3 節で調査の概要を説明し、第 4 節と第 5 節では調査で得られたデータに基づいて、宜蘭クレオールの疑問文について分析を行う。その上で、第 6 節では世代間変異を検討し、最後の第 7 節ではまとめと今後の課題について述べる。

なお、例文の後に出典もしくは使用者を［ ］で示す。また、アタヤル語と宜蘭クレオールの単語や例文の意味を〈 〉内に記す。宜蘭クレオールの音韻体系は、周辺の村で話される伝統的なアタヤル語を基本としているため、宜蘭クレオールの表記に当たっては、アタヤル語表記法に従う（「’」は声門閉鎖音/ʔ/を表す）。アタヤル語表記法は台湾行政院原住民族委員会および教育部が 2005 年 12 月に公布したものである。

2.　アタヤル語と日本語の疑問文

疑問文は、話し手にとって何が不明なのかという観点から、真偽疑問文（polar question, *yes-no* question）・選択疑問文（alternative question）・疑問詞疑問文（content questions, *wh*-question）の 3 タイプに分けられる。日本語記述文法研究会編（2003）によれば、真偽疑問文はその情報の真偽が不明であることを表す疑問文であり、選択疑問文は複数の可能性のうちどれが正しいかが話し手にとって不明なので、それを選択肢として提示する疑問文である。そして、疑問詞疑問文[2)] は、その命題の中に不明な情報が含まれることを表す疑問文である。この 3 タイプの疑問文は、アタヤル語にも日本語にもみられる。

また、日本語の疑問文には、①単に相手の考え・意向やある出来事が起こったか否かを尋ねるものと、②相手がある考え・意向を持っていると判断したうえで、あるいはある出来事が起こる／起こったことを事実として認めたうえで、それについてさらに詳しい判断や限定を求めるというものがある（益岡・田窪 1992、庵ほか 2000 など）。②は説明のモダリティを表す「のだ」が疑問化されたものである（日本語記述文法研究会編 2003）。一方、アタヤル語の疑問文にはこのような区別はないようである。日本語記述文法研究会編（2003）では②の疑問文を「『のか』疑問文」と称している。そこで、以下、本稿では①を「か疑問文」、②を「のか疑問文」と呼ぶことにする。

2.1.　アタヤル語の疑問文

本節では黄・呉（2016）の記述に基づいて、アタヤル語の疑問文について述べる[3)]。

2.1.1.　アタヤル語の真偽疑問文

アタヤル語には真偽疑問文の形式が二つある。一つは、疑問の終助詞 ga を付けて下降イントネーション（以下「↓」で示す）を取る方法で、もう一つは、平叙文の構造をそのまま使用し、疑問の終助詞 ga は付けず上昇イントネーション（以下「↑」で示す）を取っ

2）日本語記述文法研究会編（2003）では「補充疑問文」と呼んでいる。

3）本稿ではアタヤル語スコレック方言について述べる。アタヤル語は大きくスコレック方言とツオレ方言に大別されるが、疑問文に関して方言によって形式などに若干の異なりがあるものの、基本的な区別の枠組は変わらない。

て表す方法である。黄・呉（2016）のイントネーション記号を変えて日本語訳を付すと、次のようになる。なお、アタヤル語には〈丁寧さ〉の分化がないため、以下の用例の日本語訳は普通体で示す。

（1）アタヤル語

hiya’ qu yaba’=su’ {ga↓／ϕ↑}.
3S NOM 父親=2S.GEN SFP
〈彼はあなたのお父さん？〉 ［黄・呉 2016：153］

（2）アタヤル語

cyux m-nglis qu laqi’=nya’ {ga↓／ϕ↑}.
AUX AF-泣く NOM 子供=3S.GEN SFP
〈彼の子供が泣いている？〉 ［黄・呉 2016：153］

（1）は名詞述語文、（2）は動詞述語文であるが、アタヤル語の真偽疑問文では、述語に関係なく、終助詞 ga の付加もしくは上昇イントネーションを用いて、疑問を表すことができる。終助詞 ga を用いる場合、文末は下降イントネーションになる。なお、真偽疑問文に対する応答表現については、肯定の場合は aw が、否定の場合は iyat が用いられる。

2.1.2. アタヤル語の選択疑問文

選択肢 A と B を挙げてどちらかを選択させる場合、アタヤル語では次のような選択疑問文が使われる。

（3）アタヤル語

yaba’=su’ qu hiya’↓, ini’ ga↑, sinsiy=su’ {qu hiya’／ϕ}↓.
父親=2S.GEN NOM 彼 NEG TOP 先生=2S.GEN NOM 3S
〈彼はあなたのお父さん？、それとも（彼は）あなたの先生？〉
［黄・呉 2016: 153-155］

（4）アタヤル語

bhy-un ni Walis qu Watan↓, ini’ ga↑, bhy-un ni Watan qu Walis↓.
殴る-PF GEN Walis NOM Watan NEG TOP 殴る-PF GEN Watan NOM Walis
〈Walis が Watan を殴る？、それとも Watan が Walis を殴る？〉［黄・呉 2016: 156］

（3）（4）では ini’ ga で二つの節をつなげて選択疑問文にしている。否定語 ini’ とトピックマーカーga が組み合わさることによって「それとも・あるいは」の意味を表すのであるが、ini’ ga の後の節では、重複する要素を省略しても良い。例えば（3）では主格と三人称代名詞（qu hiya’）が前後の節で同じであるため、省略できる。なお、ini’ ga は上昇イントネーションを取るが、その前後の節は下降イントネーションになる。

2.1.3. アタヤル語の疑問詞疑問文

アタヤル語の疑問詞疑問文は、不定の部分に疑問詞を用い、終助詞 ga は付加しない。アタヤル語の疑問詞には、次のようなものがある。

表 1　アタヤル語の疑問詞

名詞性疑問詞（nominal interrogative）	ima’	〈誰〉	nanu’	〈何〉	qenu’	〈どれ〉		
動詞性疑問詞（verbal interrogative）	hmswa’	〈どう〉	swa’	〈なぜ〉	pira’	〈いくつ・いくら〉	ktwa’	〈いくつ・いくら〉
副詞性疑問詞（adverbuak interrogative）	inu’	〈どこ〉	knwan	〈いつ〉				
※表は黄・呉（2016）をもとに筆者が作成したものである。								

表 1 に示すように、アタヤル語の疑問詞は「名詞性疑問詞」「動詞性疑問詞」「副詞性疑問詞」に大別される。「名詞性疑問詞」ima’〈誰〉、nanu’〈何〉、qenu’〈どれ〉はいわゆる「疑問代名詞」で、「副詞性疑問詞」の inu’〈どこ〉、knwan〈いつ〉は副詞のような機能を果たすものである。「動詞性疑問詞」には hmswa’〈どう〉、swa’〈なぜ〉、pira’〈いくつ・いくら〉、ktwa’〈いくつ・いくら〉がある [4)]。これらの疑問詞を含む疑問文では、終助詞 ga は付加されず、非上昇イントネーションを取る。

(5) アタヤル語

ima　{qu／ϕ}　hiya’.

QW　NOM　3S

〈あの人は誰？〉　［黄・呉 2016:159］

(6) アタヤル語

swa’=su’　bhy-an　qu　hiya’.

QW=2S.NOM　叩く- LF　NOM　3S

〈あなたはなぜあの人を叩いたの？〉　［黄・呉 2016:164］

(7) アタヤル語

m-osa’=su’　inu.

AF-行く=2S.NOM　QW

〈あなたはどこへ行く？〉　［黄・呉 2016:168］

なお、アタヤル語の疑問詞は、(5)（6）のように文の最初に置かれることもあれば、(7)のように文中に置かれることもある。

2.2.　日本語の疑問文

本節では、益岡・田窪（1992）や庵ほか（2000）、日本語記述文法研究会編（2003）、井上・小西（2006）に基づいて、日本語の疑問文についてまとめる。

2.2.1.　日本語の真偽疑問文

日本語の真偽疑問文は、基本的に終助詞「か」を付加して疑問を表すが、述語の品詞および〈丁寧さ〉によって「か」の有無が異なる。表 2 にまとめる。

4)「動詞性疑問詞」の hmswa’〈どう〉と swa’〈なぜ〉は接語代名詞（clitic pronoun）を付加することができ、hmswa’〈どう〉と pira’〈いくつ・いくら〉と ktwa’〈いくつ・いくら〉は焦点マーカーや ATM マーカーなどの接辞を付けることができる。動詞と同じような活用をすることから、動詞性疑問詞と分類されるのである。

表 2　日本語の真偽疑問文における「か」の使用

述語の種類・テンス ＼ 丁寧さ		普通体	丁寧体
名詞述語	非過去	△	○
	過去	△	△
動詞述語	非過去	△	△
	過去	△	△
ナ形容詞述語	非過去	△	○
	過去	△	△
イ形容詞述語	非過去	△	○
	過去	△	○

凡例）○は「か」を付加する，△は「か」を付加することもあれば付加しないこともある
注）表の作成は，日本語記述文法研究会編（2003）及び井上・小西（2006）を参考にした。

日本語の真偽疑問文においては、表 2 に示すように、普通体では「か」を付けることもあれば付けずに上昇イントネーションを用いることもある。ただし、例えば、「あなたは先生か」「行かないのか」「あなたも飲むか」のように「か」を付けるとぞんざいになる。

丁寧体では基本的に「か」を付ける。名詞述語・ナ形容詞述語の過去形と動詞述語の非過去形・過去形は「か」は付けなくても良い。例えば、「あなたは先生でした｛か／φ↑｝」「明日行きます｛か／φ↑｝」「昨日行きました｛か／φ↑｝」のようなものである。一方、名詞述語・ナ形容詞述語の非過去形とイ形容詞の非過去形・過去形は「か」を付けずに上昇イントネーションだけを加えた文はやや不自然である。例えば、「？あなたは先生です↑」「？和食、好きです↑」「？今日は暑いです↑」「？昨日は暑かったです↑」のようなものである。

なお、真偽疑問文に対する応答表現については、肯定の場合は「はい」が、否定の場合は「いいえ」が用いられる。

2.2.2.　日本語の選択疑問文

選択肢 A と B を挙げてどちらかを選択させる場合、日本語では次のような選択疑問文が使われる。

(8)　あの人は学生ですか↑、先生ですか↑。

(9)　コーヒーにする↑、（それとも）紅茶にする↑。

(10)　行くの↑、行かないの↑。

「A か↑、B か↑」、「A↑、B↑」、「A の↑、B の↑」のように、終助詞「か」もしくは「の」を付けたり、上昇イントネーションのみを用いた疑問文で、選択肢を聞き手に提示して、その中から一つを選ぶよう求めるのである。

2.2.3.　日本語の疑問詞疑問文

日本語の疑問詞疑問文は、不定の部分に疑問詞を用いる。疑問詞には、指示詞「ど」系列の「どれ・どこ・どちら・どの・どんな・どう・どうして」のほかに、「誰・何・いつ・いくつ・いくら・なぜ」などがある。これらの疑問詞が疑問文であることのマーカーとなるため、疑問の意味を担う特別な終助詞やイントネーションは必須ではないが、終助詞「か」や上昇イントネーションを使用してもいい。

（11）　日本語

高橋さんはどこにいる｛*か／φ（↑）｝。

（12）　日本語

高橋さんはどこにいます｛か（↑）／φ（↑）｝。

普通体の文は、(11）のように終助詞「か」を用いず、上昇イントネーションで疑問の意味を表すことが多い。平叙文と同様の非上昇イントネーションでも疑問文として使える。丁寧体の文は（12）のように、終助詞「か」と上昇イントネーションをともに使用することもあれば、終助詞「か」と上昇イントネーションの両方もしくは一方を使うこともある。

また、疑問詞疑問文は「のか疑問文」になることが多い。特に、理由や原因を尋ねる場合には、ほぼ必須的に「のか疑問文」になる。

（13）　日本語

なぜ行かなかったの？

3.　調査概要

宜蘭クレオールは主に台湾東部の宜蘭県南澳郷東岳村・金洋村・澳花村と大同郷寒渓村の四つの村で使用されている。本稿で用いるデータは、東岳村において主として 2018 年 3 月から 2019 年 5 月にかけて、断続的に行ったフィールドワークで得られたものである。データ収集は自然談話も収録しつつ、主に面接調査で疑問表現の形式と用法を引き出す方法で行った。調査票は日本語記述文法研究会編（2003）および井上・小西（2006）を参考にしたが、調査文は村人が日常的に多く使う表現を用いた。インフォーマントは、1934～1974 年生まれの東岳村生え抜きの宜蘭クレオール話者で計 14 人である（表 3)。

南澳郷の山奥に住んでいたアタヤル人とセデック人が日本植民地当局によって東岳村に移住させられたのは 1913 年からのことである（臺灣總督府警務局 1938)。当時の移住者世代を移民一世とすれば、インフォーマント KFS と HFS は二世にあたり、SFT・WFT・AMT・NFT・IMT・UFT・CMT・JFT・GMT・LFT は三世、BFF と YFF は四世である。

表 3　インフォーマント一覧

インフォーマント略号	性別	生年	移民世代	インフォーマント略号	性別	生年	移民世代
KFS	女性	1934	二世	UFT	女性	1958	三世
HFS	女性	1939	二世	CMT	男性	1959	三世
SFT	女性	1947	三世	JFT	女性	1959	三世
WFT	女性	1950	三世	GMT	男性	1964	三世
AMT	男性	1951	三世	LFT	女性	1966	三世
NFT	女性	1955	三世	BFF	女性	1968	四世
IMT	男性	1957	三世	YFF	女性	1974	四世

※インフォーマント略号は，名前・性別・移民世代の順に示した。二世はSecondのS，三世はThirdのT，四世はFourthのFで表す。

4.　宜蘭クレオールの疑問文

宜蘭クレオールの疑問文にも、真偽疑問文・選択疑問文・疑問詞疑問文の 3 タイプがある。また、日本語における「か疑問文」と「のか疑問文」の区別が真偽疑問文にのみみら

れる。

なお、宜蘭クレオールは村の中での使用言語であり、日本語のような〈丁寧さ〉の分化もなく、目上などを相手に話す場合でも日本語普通体由来の形式が使われる。データ収集の際も、家族や近所との会話という設定で聞いたため、以下の用例のグロスにおける日本語訳は普通体で示すことにする。

4.1. 宜蘭クレオールの真偽疑問文

4.1.1. 宜蘭クレオールの真偽疑問文—「か疑問文」—

まず、真偽疑問文の「か疑問文」について、名詞述語文、動詞述語文、形容詞述語文[5)]の順に見てみよう。

（14） are　anta/nta[6)]　no　sensey↑.
3S　2S　GEN　先生
〈あの人はあなたの先生？〉　［全員］

（15） are　anta/nta　no　sensey　ga↓.
3S　2S　GEN　先生　SFP
〈あの人はあなたの先生？〉　［KFS・HFS・SFT・IMT・GMT・YFF］

（16） are　lela　ga　sensey↑.
3S　昔　TOP　先生
〈あの人は先生だった？〉　［全員］

（17） are　lela　ga　sensey　ga↓.
3S　昔　TOP　先生　SFP
〈あの人は先生だった？〉　［KFS・HFS・SFT・IMT・GMT・YFF］

宜蘭クレオールの名詞述語文では、テンスに関係なく、（14）（16）のように疑問を表す終助詞 ga を付加せず、上昇イントネーションで疑問を表すことが多い。一方、（15）（17）のように終助詞 ga を付けて下降イントネーションを取ることもある。（14）（16）はすべてのインフォーマントが使用するが、（15）（17）は KFS・HFS・SFT・IMT・GMT・YFF が使う（ただし、SFT・IMT・GMT・YFF は使用頻度が低いと内省している）。なお、宜蘭クレオールでは、名詞述語文の過去形は述語では表さず、lela〈以前〉や mae〈前〉、sony〈さっき〉などの時間副詞が用いられる。

動詞述語について、テンス・アスペクトの違いごとに具体例を挙げると、次のようになる。

（18） ato　mayah　ik-u↑.

5）宜蘭クレオールには日本語の「い形容詞」「な形容詞」由来の語彙もあれば、アタヤル語の「静態動詞」由来の語彙もある。その形態論的・統語論的振舞いはどうなっているのか、品詞として形容詞を認めるべきかどうかは現在調査研究中であるが、本稿では暫定的に「形容詞」とする。

6）二人称単数形に anta とその短縮形 nta があるが、YFF は anta を、KFS・HFS・SFT・WFT は nta を使用しない。

後　畑　行く-NPST　［全員］
〈後で畑に行く？〉

（19）ato　mayah　ik-u　ga↑.
後　畑　行く-NPST　SFP　［KFS・HFS・GMT］
〈後で畑に行く？〉

（20）anta/nta　no　mama　or-u　{φ↑／*ga}.
2S　GEN　お母さん　いる-NPST　SFP
〈あなたのお母さん、いる？〉　［全員］

（21）kino　yasay　uye-ta　{φ↑／*ga}.
昨日　野菜　植える-PST　SFP
〈昨日、野菜植えた？〉　［全員］

（22）A: anta/nta　gohang　tabe-ta　{φ↑／*ga}　mo.
2S　ご飯　食べる-PST　SFP　もう
〈あなたはもうご飯、食べた？〉
B: tabe-ta　mo.
食べる-PST　もう
〈もう食べた。〉　［全員］

（23）ima　gohang　tabe-toru　{φ↑／*ga}.
今　ご飯　食べる-CONT.NPST　SFP
〈今、ご飯を食べている？〉　［全員］

述語について、（18）（19）は動作動詞の非過去形（未来）、（20）は存在動詞の非過去形（現在）、（21）（22）は動作動詞の過去形、（23）は現在進行形であるが、（19）を除いて、すべての用例には終助詞 ga が用いられない。その代わりに、上昇イントネーションが付加され、疑問の意が表される。

（18）と（20）～（23）は、すべてのインフォーマントが使用するものであるが、KFS・HFS・GMT の三人はこのほかに、動作動詞の非過去形（未来）について、終助詞 ga を付けた（19）も使用する [7]。そして、その際は上昇イントネーションにしている。ただし、KFS・HFS は（19）を使うことはあり、GMT も許容できるとしているが、三人とも終助詞 ga を付けない（18）のほうが多いと内省している。

形容詞述語の場合、終助詞 ga が付加されることもあれば、付加されないこともある。

（24）kono/kore　mikang　oisi-y/osi↑.[8]
DEM　みかん　おいしい-NPST
〈このみかん、おいしい？）　［全員］

7）なぜ動作動詞の非過去形（未来）にのみ ga が用いられるのか、また、その際に上昇イントネーションとなるのかについては、今のところ不明である。
8）指示形容詞として kono が使われるが、CMT・UFT・JFT・GMT・LFT・BFF は kono のほかに kore も使用し、YFF は kore しか使わない（簡 2019b）。また、日本語「おいしい」由来の単語について、二世は oisi、三世と四世は osi と言う傾向がある（簡 2018a）。

（25） kono　mikang　oisi-y/osi↑　ga↓.
DEM　みかん　おいしい-NPST　SFP
〈このみかん、おいしい？〉　［KFS・HFS・SFT・IMT］

（26） kono/kore　lukus　myasa↑.
DEM　服　綺麗
〈この服、綺麗？〉　［全員］

（27） kono　lukus　myasa↑　ga↓.
DEM　服　綺麗　SFP
〈この服、綺麗？〉　［KFS・HFS・SFT・IMT］

（24）（25）では日本語「おいしい」由来の oisi/osi が、（26）（27）ではアタヤル語 myasa〈綺麗・良い〉由来の myasa が述語として使われている。形容詞述語では、（24）（26）のように、名詞述語と同様に疑問を表す終助詞 ga を付加せず上昇イントネーションで疑問を表すこともあれば、（25）（27）のように ga を付けて下降イントネーションを取ることもある。すべてのインフォーマントは終助詞 ga を付加しない（24）（26）を使用するが、KFS・HFS・SFT・IMT は終助詞 ga を付加する（25）（27）を使うこともあるという。ただし、SFT・IMT は終助詞 ga の使用頻度が低く、KFS・HFS も（24）（26）の方が多いと内省している。なお、形容詞述語は名詞述語と同様に、過去テンスが形態素で表されず，時間副詞で統語的に表す。名詞文と形容詞文における終助詞 ga の有無はテンスに左右されることはない。

以上述べてきたように、真偽疑問文の「か疑問文」における終助詞 ga の使用には述語による違い、インフォーマントによる違いなどのバリエーションがあることが明らかになった。この点に関する考察は第 6 節で行う。

4.1.2. 宜蘭クレオールの真偽疑問文—「のか疑問文」—

「のか疑問文」は、前述のように、単に相手の考え・意向やある出来事が起こったか否かを尋ねる「か疑問文」と異なり、相手がある考え・意向を持っていると判断したうえで、あるいはある出来事が起こる／起こったことを事実として認めたうえで、それについてさらに詳しい判断や限定を求めるというものである。では、宜蘭クレオールにおける「のか疑問文」の使用例を見てみよう。

（28）（小学校の門から出てきた、先生らしき人を見て）

A：are　atarasi　no　sensey↑　ga↓.
3S　新しい　GEN　先生　SFP
〈あの人、新しい先生なの？〉

B：cigo/cigaw　yo.
違う　SFP
〈違うよ。〉　［全員］

(29)　(外出着に着替えておしゃれしているのを見て)

anta/nta　der-u↑　ga↓.

2S　出る-NPST　SFP

〈あなた、出かけるの？〉　［全員］

(30)　(野菜を手に持っているのを見て)

A：mayah　i-ta↑　ga↓.

畑　行く-PST　SFP

〈畑に行ってきたの？〉

B：so/ho.[9)]

RESP

〈そう。〉　［全員］

(31)　(電話をした相手の家からテレビの音が聞こえて)

tensu　mi-toru↑　ga↓.

テレビ　見る-CONT.NPST　SFP

〈テレビを見ているの？〉　［全員］

(32)　(汗だくなのを見て)

anta/nta　acu-y/kilux/kilox↑　ga↓.　lngci　aker-o.

2S　暑い-NPST　SFP　冷房　つける-VOL

〈あなた、暑いの？冷房、つけよう。〉　［全員］

(28) は小学校の門から出てきた、先生らしき人を見て、新しい先生と判断して、相手にその判断が正しいか否かを確かめるものである。(29) は相手が外出着に着替えておしゃれしているのを見て、外出すると判断して、相手にその判断が正しいか否かを聞いている。(30) は相手が野菜を手に持っているのを見て、畑に行ってきたと判断して、相手にその判断が正しいか否かを尋ねている。(31) は電話の向こうからテレビの音が聞こえたため、相手がテレビを見ていると判断して、相手にその判断が正しいか否かを確かめるものである。(32) は相手が汗だくなのを見て、暑がっていると判断し、相手にその判断が正しいか否かを聞いて、解決法となる行動（冷房をつける）に移ろうとする際の発話である。いずれも相手や周りにある根拠に基づいて質問し、自分自身の判断が合っているかどうか答えを求めるという「のか疑問文」である。先行文脈や状況とその文との「関連づけ」を表す用法である。

(28) ～ (32) はそれぞれ名詞述語（非過去形）、動詞述語（非過去形（未来））、動詞述語（過去形）、動詞述語（現在進行形）、形容詞述語（非過去形）であるが、いずれの文も終助詞 ga の使用は義務的で省略できない。また、その使用には世代差はない。なお、終助詞 ga を用いる文は、文末では下降イントネーションを取る。これはアタヤル語の文イントネーション（2.1.1 節参照）をそのまま反映したものであろう。ただし、宜蘭クレオールではアタヤル語とは異なり、終助詞 ga の前の述語部分が上昇イントネーション

9）年配の世代は so、若い世代は ho を使う傾向がある。

となる。

4.2. 選択疑問文

選択肢 A と B を挙げてどちらかを選択させる場合、宜蘭クレオールでは次のような選択疑問文が使われる。

(33) are anta/nta no nisang↑ ka↓, ototo {ka↓/φ↓/φ↑}.
3S 2S GEN 兄 SFP 弟 SFP
〈あの人はあなたのお兄さん？、弟さん？〉 [KFS・HFS]

(34) ama ngasan or-u↑ ka↓, yama or-u↑ {ka↓/φ↓/φ↑}.
おばあさん 家 いる-NPST SFP 山 いる-NPST SFP
〈おばあさんは家にいる？、山にいる？〉 [KFS・HFS]

(35) are anta no nisang↑ ga↓, ototo↑ ga↓.
3S 2S GEN 兄 SFP 弟 SFP
〈あの人はあなたのお兄さん？、弟さん？〉 [KFS・HFS・SFT]

(36) ama ngasan or-u↑ ga↓, yama or-u↑ ga↓.
おばあさん 家 いる-NPST SFP 山 いる-NPST SFP
〈おばあさんは家にいる？、山にいる？〉 [KFS・HFS・SFT]

(37) are anta/nta no koko↑, titi↑.
3S 2S GEN 兄 弟
〈あの人はあなたのお兄さん？、弟さん？〉 [全員]

(38) ama ngasan/ngasang[10] or-u↑, yama or-u↑.
おばあさん 家 いる-NPST 山 いる-NPST
〈おばあさんは家にいる？、山にいる？〉 [全員]

(39) are anta/nta no koko↑ ga↓, titi↓.
3S 2S GEN 兄 TOP 弟
〈あの人はあなたのお兄さん？、弟さん？〉 [全員]

(40) ama ngasan/ngasang or-u↑ ga↓, yama or-u↓.
おばあさん 家 いる-NPST TOP 山 いる-NPST
〈おばあさんは家にいる？、山にいる？〉 [全員]

(41) are anta/nta no koko↑ wa↓, titi↓.
3S 2S GEN 兄 TOP 弟
〈あの人はあなたのお兄さん？、弟さん？〉 [IMT・UFT・JFT・GMT・LFT・BFF]

(42) ama ngasan/ngasang or-u↑ wa↓, yama or-u↓.
おばあさん 家 いる-NPST TOP 山 いる-NPST
〈おばあさんは家にいる？、山にいる？〉 [IMT・UFT・JFT・GMT・LFT・BFF]

(33)(34)は「A ka↓, B ka↓」「A ka↓, B↓」「A ka↓, B↑」のいずれの形でも使え

10) 二世は ngasan、三世と四世は ngasang と発音する傾向がある。

る。疑問の終助詞に日本語の終助詞「か」由来の ka が使われるが、これは二世のみの使用である。また，(35)（36）の「A ga↓，B ga↓」構文は二世と年配の三世（KFS・HFS・SFT）だけに観察される。二世を含むすべてのインフォーマントは（37）（38）のように ga を省略して「A↑，B↑」もしくは（39）（40）のような「A ga↓，B↓」を用いる。そして、二世以外のインフォーマントは（39）（40）のような「A ga↓，B↓」を最もよく使うと内省している。なお、IMT・UFT・JFT・GMT・LFT・BFF は（41）（42）のような「A wa↓，B↓」構文も使う。

2 節で述べたアタヤル語・日本語の選択疑問文と照らし合わせると、上記の「A ka↓，B ka↓」「A ga↓，B ga↓」「A↑，B↑」は日本語の「A か↑、B か↑」「A↑、B↑」を受け継いだものであり、そのうちの「A ga↓，B ga↓」は終助詞 ka がアタヤル語由来の終助詞 ga に置き換えられたものであるとみてよいだろう。一方、「A ga↓，B↓」はアタヤル語の選択疑問文からの影響ではないかと考えられる。アタヤル語の選択疑問文は「A↓，ini’ga↑，B↓」を用いるが、宜蘭クレオールでは否定語 ini’を省き、トピックマーカーga だけを残して選択疑問文の要素にした可能性が高い。すなわち、「A ga↓，B ga↓」における ga は疑問の終助詞 ga であるが、「A ga↓，B↓」における ga はアタヤル語のトピックマーカーga 由来のものなのである。

その根拠として、(41)（42）の「A wa↓，B↓」の使用が挙げられる。「A wa↓，B↓」の wa は日本語の取り立て助詞「は」由来で、トピックマーカーとしての機能を持つものである。インフォーマントのうち、IMT・UFT・JFT・GMT・LFT・BFF は「A ga↓，B↓」と同じ意味で「A wa↓，B↓」も使えると内省しているが、ここから、「A ga↓，B↓」の ga は疑問の終助詞ではなく、トピックマーカーであることが推測される。なお、イントネーションは前節の真偽疑問文と同様に、ga の前の述語で上昇イントネーション、ga で下降イントネーション、を取る。これはアタヤル語とも日本語とも異なる。

4.3.　宜蘭クレオールの疑問詞疑問文

宜蘭クレオールの疑問詞疑問文は、日本語由来の疑問詞を用い、終助詞 ga が使えない。イントネーションも平叙文と同様で、特に上昇しない。このような使用に関しては個人差がみられない。

宜蘭クレオールの疑問詞には、指示詞「do」系列の「dore〈どれ〉，doko〈どこ・どちら〉，dono〈どの〉，donna (no)〈どんな〉，donnasite/donnate/donnani/donna〈どう〉」のほかに、「dare〈誰〉，nani〈何〉，icu〈いつ〉，ikura/ukura〈いくら〉，dosite〈なぜ〉」などがある[11)]。これらはすべて日本語由来の形式で、アタヤル語由来の形式は取り込まれていない。これらの疑問詞が疑問文であることのマーカーとなるため、疑問の意味を担う特別な終助詞や上昇イントネーションは必要ない。

11）「do」系列の指示詞が不定称を担うのは由来言語の日本語と同様であるが、その意味用法の詳細については簡（2019b）を参照されたい。

（43） anta/nta　doko　ik-u　｛φ／*ga｝.
2S　どこ　行く-NPST
〈あなた、どこへ行く？）　［全員］

（44） nani　kore　｛φ／*ga｝.
何　DEM
〈何？これ）　［全員］

（45） dare　to-ta　｛φ／*ga｝.
誰　取る-PST
〈誰が取ったの？〉　［全員］

（46） dosite　hosyosu-ru｛φ／*ga｝.
なぜ　うそする-NPST
〈なぜうそをつく？〉

真偽疑問文とは異なり、宜蘭クレオールの疑問詞疑問文では、「か疑問文」か「のか疑問文」かの区別はない。理由や原因を尋ねる場合（（46））でも、「のか疑問文」を用いることはない。宜蘭クレオールでは疑問詞と終助詞 ga は共起しないのである。なお、宜蘭クレオールの疑問詞は文の最初に置くこともあれば（(44)（45）（46））、文中に置くこともある（(43)）。

5.　宜蘭クレオールの疑問文にみられる質問以外の機能

疑問文の主要な機能は《質問》であるが、《質問》以外の機能もある。紙幅の都合上、《質問》以外の機能を網羅することはできない。ここでは使用頻度が高い《勧誘》、《丁寧な依頼》、《納得》を取り上げて見ていくことにする。

5.1.　勧誘

宜蘭クレオールでは、終助詞 ga が否定形に付くことがある。それは単に否定命題の真偽を問う場合もあるが、否定命題について尋ねるのではなく《勧誘》を表す場合もある。

（47）　（礼拝の前に出かけようとするのを見て）
anta/nta　deru　ga↓.　kyokay　ik-ang　ga↓.
2S　出る　SFP　教会　行く-NEG　SFP
〈あなた、出かけるの？教会に行かないの？〉　［全員］

（48） isyo　nom-ang　｛ga↓／φ↑｝.
一緒　飲む- NEG　SFP
〈一緒に飲まない？〉　［全員］

（49） isyo　ik-ang　｛ga↓／φ↑｝.
一緒　行く- NEG　SFP
〈一緒に行かない？〉　［全員］

（47）～（49）は、いずれも述語の否定形式（ikang、nomang）に疑問の終助詞 ga が付加されている。しかし、（47）の「kyokay ikang ga↓」は単に否定命題の真偽を問うものであ

るのに対して、(48)(49)は否定命題について尋ねるのではなく、《勧誘》を表している。(47)は ga が省略できないが、(48)(49)は ga が省略できる。

5.2.　丁寧な依頼

宜蘭クレオールでは、終助詞 ga が命令形に付くことがある。命令形はコンテキストによって《命令》や《依頼》を表すが、終助詞 ga を付加して疑問の意味を提示することによって、柔らかな口調になって丁寧な《依頼》になる。文末は上昇イントネーションを用いる。

(50) mama,　lukus　tote+kwe-y[12)]　ga↑.
ママ　服　取る. SEQ+来る- IMP　SFP
〈ママ、服を取ってきてくれる？〉
［KFS・HFS・SFT・AMT・NFT・IMT・UFT・CMT・GMT・LFT・BFF］

(51) kosi　tor-e　ga↑.
すこし　取る- IMP　SFP
〈ちょっと取ってくれる？〉
［KFS・HFS・SFT・AMT・NFT・IMT・UFT・CMT・GMT・LFT・BFF］

ただし、三世の JFT と四世の YFF は、(50)(51)のように命令形に終助詞 ga を付けた表現はせず、命令形だけを用いて《依頼》を表す。

5.3.　納得

相手から新しい情報を得たあと、内心で確認したことを表すもので、相手が直前に言った文や述語を繰り返して文末に終助詞 ga を付けて《納得》を表す。

(52) A1: anta/nta　hiru　yama　ik-u↑　mata.
2S　昼　山　行く-NPST　また
〈あなた、昼また山へ行く？〉
B2: so/ho,　mata　ik-u.
RESP　また　行く-NPST
〈そう、また行く。〉
A3: konna　ga↓.　dakara,　wasi　anta/nta　to　isyo　ik-u.
DEM　SFP　だから　1S　2S　COM　一緒　行く- NPST
〈そうか。じゃ、わたし、あなたと一緒に行く。〉　［全員］

(53) A1: Taeko,　ngasan/ngasang　or-u↑.
Taeko　家　いる- NPST
〈Taeko は家にいる？〉
B2: or-anay.
いる- NEG. NPST

12) totekwey は totekoy と発音されることがある。

〈いない。〉

A3: or-anay　　ga↓.

いる- NEG. NPST　　SFP

〈いないか。〉　　［全員］

（52）では、A3 で前出の述語 iku を konna〈そう〉に置き換えて ga を付け加えることによって、〈納得〉を表す。（53）では、A3 で相手が直前に言った述語 oranay を繰り返してさらに ga を付けて、〈納得〉を表している。いずれも下降イントネーションを取る。

6.　宜蘭クレオールの疑問文における終助詞 ga のバリエーション

以上、宜蘭クレオールにおける終助詞 ga の使用には、疑問文の種類による違い、インフォーマント間の差異がみられることが明らかになった。ここでは、そのバリエーションから、終助詞 ga の使用の変化の様相を探ってみたい。表 4 に終助詞 ga の使用状況を示す。表では、横軸にインフォーマントを年齢順に、縦軸に疑問文を種類別に配置した。

表 4　終助詞 ga の使用

疑問文		述語タイプ	インフォーマント略号・生年	KFS	HFS	SFT	WFT	AMT	NFT	IMT	UFT	CMT	JFT	GMT	LFT	BFF	YFF
				1934	1939	1947	1950	1951	1955	1957	1958	1959	1959	1964	1966	1968	1974
《質問》機能	真偽疑問文「のか疑問文」			◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	真偽疑問文「か疑問文」	名詞述語		○	○	△	×	×	×	△	×	×	×	△	×	×	△
		形容詞述語		○	○	△	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×
		動詞述語	非過去形（未来）	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×
			現在進行形	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
			過去形	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	選択疑問文			○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	疑問詞疑問文			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
《質問》以外の機能の疑問文	《納得》			◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	《丁寧な依頼》			◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	◎	×
	《勧誘》			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

凡例）◎はgaを付加する，○はgaを付加することもあれば付加しないこともある，△はgaの使用頻度が低い，×はgaを付加しないということを表す。

この表から、次のようなことが読み取れる。

① 疑問文の種類による違いがみられる。まず、《質問》機能を持つ疑問文について、真偽疑問文の「のか疑問文」では ga が義務的であり、真偽疑問文の「か疑問文」と選択疑問文では終助詞 ga が散見される。一方、疑問詞疑問文では ga が使用されない。次に《質問》以外の機能の疑問文について、《納得》では ga が義務的であるが、《丁寧な依頼》では ga を使わない人もおり、《勧誘》では ga が選択的である。

② インフォーマント間差異が顕著なのは、真偽疑問文の「か疑問文」と選択疑問文である。まず、横軸をみると、若い世代ほど「か疑問文」における終助詞 ga の使用が減少傾向にあることがわかる。二世に ga の使用が一部みられ、三世の SFT・IMT・GMT と四世の YFF に ga の使用も若干みられるものの（4 人とも ga の使用頻度が低いと内省している）、若い世代は全体的に「か疑問文」には終助詞 ga を用いない（上昇イントネーションで表す）傾向が指摘できる。次に、縦軸をみると、動詞述語の現在進行形および過去形では ga の使用が二世からすでにみられないことがわかる。ここから、真偽疑問文の「か疑問文」では動詞述語の現在進行形と過去形で ga が先に消失したこと

が推測される。また、選択疑問文では終助詞 ga を使うのは年配のインフォーマント（KFS・HFS・SFT）のみである（ほかのインフォーマントはトピックマーカー由来の ga もしくは wa を使う）。

以上のことから、ga は《質問》以外の機能として安定的に使用される一方、《質問》を表す機能では、真偽疑問文「のか疑問文」を表す専用形式になりつつあることが指摘できる。

また、第 2 節で述べたアタヤル語と日本語の疑問文と照らし合わせると、まず、真偽疑問文の「のか疑問文」については ga が義務的である点、および、真偽疑問文の「か疑問文」において動詞述語の現在進行形と過去形に終助詞 ga が使われない点は宜蘭クレオールの独自のものであると言える。次に、選択疑問文では、二世と年配の三世に日本語からの影響がみられるが、一方、全員が終助詞ではなくトピックマーカーを使う点にアタヤル語からの影響が一部観察される。そして、宜蘭クレオールの疑問詞疑問文において終助詞 ga が使われないのは、アタヤル語と日本語[13] 双方からの影響なのではないかと考えられる。ただし、なぜ動詞述語の現在進行形および過去形において先に終助詞 ga が消失したのか、その理由はまだわからない。

7.　まとめと今後の課題

以上本稿では、宜蘭クレオールの疑問文について考察を行ったが、明らかになったことをまとめると、次のようになる。

① 疑問の終助詞はアタヤル語由来の ga が用いられる（4.1 節）。

② 疑問詞には日本語由来の形式が用いられる（4.3 節）。

③ 真偽疑問文の「か疑問文」では主に上昇イントネーションが用いられるが、終助詞 ga の使用もわずかながら観察される（4.1.1 節）。真偽疑問文の「のか疑問文」では終助詞 ga の使用が義務的である（4.1.2 節）。

④ 選択疑問文では、「A ka↓，B↑」「A↑，B↑」に上昇イントネーションがあらわれ，他は下降イントネーションである。また、二世と年配の三世は日本語由来の ka やアタヤル語由来の終助詞 ga も使うが、ほかのインフォーマントはトピックマーカー由来の ga もしくは wa のみ使う（4.2 節）。

⑤ 疑問詞疑問文は上昇イントネーションも終助詞 ga も使わず、疑問詞で疑問を表す。世代間差異はない（4.3 節）。

⑥ 疑問文の種類による違いおよびインフォーマント間の差異から、終助詞 ga の変化について、まず、ga が真偽疑問文の「のか疑問文」の標識に特化したことが大きな特徴として挙げられる。次に、真偽疑問文の「か疑問文」において動詞述語の現在進行形と過去形で ga が先に消失したことが推測される（6 節）。

⑦ 宜蘭クレオールの終助詞 ga には《勧誘》《丁寧な依頼》《納得》など《質問》以外の機能」もある。個人差はほぼない。

13）日本の方言は全国的に疑問詞疑問文で「か」が用いられにくい（井上・小西 2006）。

今回、特に注目されるのは、《質問》を表す機能において、終助詞 ga が真偽疑問文の「のか疑問文」を表す専用形式になりつつあるという点である。上層言語の日本語では「関連づけ」の「のだ」やその疑問形「のか」が多用される傾向にあるが、基層言語のアタヤル語はそれに対応する形式を持ち合わせていないようである[14]。宜蘭クレオールでは、今のところ「のだ」に対応する形式は観察されておらず、疑問形「のか」に対応する形式として ga の存在だけが明らかになった。なぜ宜蘭クレオールでは「関連づけ」の疑問という文法的意味に敏感であるのか、その追究は今後の課題である。また、なぜ「質問を表す機能」の ga が真偽疑問文の「のか疑問文」の標識へと変化したのかという点はモダリティ体系の中で考える必要がある。これも今後の課題とする。

最後に、世界のクレオールの疑問文との比較について触れておきたい。世界のクレオールにおける真偽疑問文については、文末に疑問の助詞を付ける方法や文の最初に疑問の助詞を置く方法などもあるが、大多数のクレオールは疑問を表す標識を付けずに、文末で上昇イントネーションを用いて疑問を表す（Winford 2008、Haspelmath et al. 2013b）[15]。それに対して、宜蘭クレオールでは、真偽疑問文の「か疑問文」においては主に上昇イントネーションを用いて疑問を表すが、真偽疑問文の「のか疑問文」においては疑問の終助詞 ga が義務的である（下降イントネーションを用いる）。また、世界のクレオールにおける疑問詞疑問文については、疑問詞は一語からなるものもあるが、what person〈who〉のような分析的構造（QW＋person）をとる複合語（疑問句）の多いことが大きな特徴として挙げられる（Holm 1988、Muysken & Smith 1990、Winford 2008）。疑問詞（疑問句）の構文的位置に関しては、多くのクレオール、特に SVO を語順とする言語では[16]、疑問詞（疑問句）が文の最初に置かれる。ただし、一部のクレオールでは、疑問詞（疑問句）が平叙文と同じ文内の位置に置かれることもある（Haspelmath et al. 2013a）。宜蘭クレオールでは日本語由来の疑問詞体系が取り込まれ、分析的な構造の疑問詞を使用しておらず、疑問詞疑問文では終助詞 ga も使わない。疑問詞の構文的位置については、文の最初に置かれることも文内に置かれることもある。世界のクレオールとの異同についてのさらなる追究も今後の課題である。

略号一覧

1S 一人称単数、2S 二人称単数、3S 三人称単数、AF 行為者焦点、AUX 助動詞、CONT 継続相、DEM 指示詞（指示代名詞・指示形容詞・指示副詞の定称と不定称）、GEN 属格、IMP 命令、LF 場所焦点、NOM 主格、NPST 非過去、PST 過去、PF 対象焦点、QW 疑問詞、RESP 応答表現、SEQ 継起、SFP 文末助詞、TOP トピック、VOL 意志、-接辞境界、=接語境界、+複合語内部の要素境界

14）管見の限り、アタヤル語に「のだ」「のか」の存在に関する報告はないようである。
15）クレオールではないが、世界の言語において、真偽疑問文の表示は疑問の助詞（question particles）を付けることが最も多く観察される（Dryer 2013）。
16）宜蘭クレオールは SOV を基本語順としている（Chien 2016）。

付記

本稿は、（日本）国際交流基金2017年度日本研究フェローシッププログラムプロジェクト「宜蘭クレオールのモダリティ」（受入教員：大阪大学渋谷勝己教授）、および（台湾）科技部プロジェクトにおける「宜蘭縣日語克里奥爾之語氣系統」（106-2410-H-259 -021、研究代表者：簡月真）での研究成果の一部である。調査にご協力くださった東岳村のインフォーマントの方々に心からお礼申し上げる。渋谷勝己先生には移民世代の分け方やバリエーションの分析など方法論についてご教示いただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

また、本稿は天理台湾学会第28回研究大会（天理大学、2018年6月30日）での研究発表に基づいて修正・加筆したものである。発表時には、前田均先生をはじめ、多くの先生方より貴重なコメントを賜った。本稿の作成に当たっては真田信治先生および佐竹久仁子先生よりご助言を、ピアレビュアーから有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。

参考文献

安部清哉・土田滋・新居田純野（2008）「研究ノート アタヤル語（泰雅語）の寒渓方言に入った日本語－台湾原住民言語能力試験問題における」『東洋文化研究』10, pp.696-730，東洋大学.

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリエーネットワーク.

井上優・小西いずみ（2006）「疑問表現」大西拓一郎（編）『方言文法調査ガイドブック 2』pp.189-209，科学研究費基盤研究報告書.

簡月真（2018a）「宜蘭クレオールの基礎語彙の様相－東岳村の場合—」*Language and Linguistics in Oceania* 10，pp.67-87，The Japanese Association of Linguistics in Oceania.

———（2018b）「日本語を上層とする宜蘭クレオールの人称代名詞」『日本語の研究』14-4, pp.31-47，日本語学会.

———（2019a）「日本語を上層とする宜蘭クレオールの数詞」『政大日本研究』16, pp.211-240, 政治大学.

———（2019b）「日本語を上層とする宜蘭クレオールの指示詞」『社会言語科学』2-2, pp.50-65, 社会言語科学会.

簡月真・真田信治（2011）「台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞—『ナイ』と『ン』の変容をめぐって—」『言語研究』140，pp.73-87，日本言語学会.

黄美金・呉新生（2016）『泰雅語語法概論』新北市：原住民族委員會.

真田信治（2015）「宜蘭クレオールの『衣・食・住』語彙について」『語彙研究』12, pp.9-16.

真田信治・簡月真（2007）「台湾アタヤル族における日本語クレオール」日本語学会 2007 年春季大会口頭発表．関西大学，5 月 26 日-27 日.

————————（2008）「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4-2, pp.69-76，日本語学会．.

臺灣總督府警務局（1938）『高砂族調査書—第五編 蕃社概況 迷信—』，臺北：臺灣總督府警務局.

田中春美・樋口時弘・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・下宮忠雄・田中幸子（編）（1988）『現代言語学辞典』東京：成美堂.

土田滋（2008）「日本語ベースのクリオール－アタヤル語寒渓方言－」『台湾原住民研究』12, pp.159-172，順益原住民博物館.

日本語記述文法研究会編（2003）『現在日本語文法４　モダリティ』東京：くろしお出版.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』東京：くろしお出版.

Chien, Yuehchen (2015) The Lexical System of Yilan Creole. In Elizabeth Zeitoun, Stacy F. Teng and Joy J. Wu (eds.), *New Advances in Formosan Linguistics*, pp.513-532. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.

Chien, Yuehchen (2016) Yilan Creole Case Marking, 国立国語研究所論集 10, pp.1-17.

Chien, Yuehchen and Shinji Sanada (2010) Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25-2, pp.350-357.

Dryer, Matthew S. (2013) Polar Questions. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/116, Accessed on 2019-03-20.)

Haspelmath Martin and The APiCS Consortium (2013a) Position of interrogative phrases in content questions. In Susanne Maria Michaelis, Philippe Maurer, Martin Haspelmath, and Magnus Huber (eds.) *The Atlas of Pidgin and Creole Language Structures*, pp.44-47. Oxford: Oxford University Press.

Haspelmath Martin and The APiCS Consortium (2013b) Polar questions. In Susanne Maria Michaelis, Philippe Maurer, Martin Haspelmath, and Magnus Huber (eds.) *The Atlas of Pidgin and Creole Language Structures*, pp.410-413. Oxford: Oxford University Press.

Holm, John (1988) *Pidgins and Creole: Volume Ⅰ*. New York: Cambridge.

Huang, Lillian M. (2009) Hanxi: A case study of creolization in Taiwan. Presented at the Eleventh International Conference on Austronesian Linguistics, 22-26 June. Aussois, France.

Muysken, Peter and Norval Smith (1990) Question words in pidgin and creole languages. *Linguistics*, 28, pp.883-903.

Winford, Donald (2008) Atlantic Creole Syntax. In: Silvia Kouwenberg and John Victor Singler (eds.) *The Handbook of Pidgin and Creole Studies*, pp.19-47. UK: Wiley-Black Well.

かん　げっしん（台湾　国立東華大学准教授・大阪大学大学院修了生）